



卓 話

2. ウガンダの難民キャンプでのアジア学院卒業生による有機農業の実践

今年の4月に私は、南アで開かれた国連主催の会議に出席した帰路に、ウガンダに立ち寄り、コンゴ共和国との国境にある難民キャンプを訪問してきました。そこではスーダン、コンゴ、ルワンダなどからの難民約二万人が生活していましたが、二人のアジア学院卒業生たちが難民に有機農業を教え、ウガンダ政府が国連に提供した広い敷地内の各自の家の周りの家庭菜園で、主食のとうもろこし、空気中の窒素を固定する大豆、イモ類、バナナなどの果樹を有機農法で栽培して栄養価の高い食べ物がある程度自給しているために、子どもたちは元気一杯で一人も飢えた子は見当たりませんでした。スーダンの難民は一部内戦が終結したために故国への帰還が始まっていますが、戦乱で荒れ果てた故国に自給を可能にする有機農法の技術と経験を持って難民が帰っていくことは、大きな意味をもっていると思われま

3. ミャンマーの食糧生産の状況と、アジア学院卒業生の活動

ミャンマーの国民が、軍事政権のもとで大きな苦しみを味わっていることは、よく知られています。特に、軍事政権の経済政策の失敗のために大変なインフレに見舞われています。しかし中部ミャンマーにアジア学院の卒業生を訪ねてみると、インフレを「追い風」にして、化学肥料や農薬に頼らない有機農業が燎原の火のように広がっていました。化学肥料も農薬も、余りにも高い値段のために買えなくなった農民たちによって、有機農業による米作りが行なわれ、人々が飢えないですむ必要な量の米が生産されているのです。

4. カンボジアにおけるJICAとNGOの共同プロジェクト

1992年、日本政府は、「食糧増産援助(2KR)」として、和平が成立したばかりのカンボジアに1億円相当の農薬を含む5億円の援助を決定し、JICAを通じて、翌1993年には、農薬や化学肥料などがカンボジアに届きました。しかし、現地で活動してきたNGOや、国際機関の専門家から、農薬規制の法律が未整備のカンボジアに農薬を供与することは、環境汚染や残留

「世界の逼迫する食糧事情と問題解決への取り組み」

アジア学院常任理事・元国際基督教大学教授

田坂 興亜氏

最初に、ロータリー米山奨学金という形で、長年にわたりアジア学院で学ぶアジア・アフリカの研修生を支えて頂いていることを心から感謝致します。



さて、現在私たちは中国産食品の農薬汚染、農薬、カビ毒汚染のミニマム・アクセス米の食用への流用などで明らかになった「食の安全」の問題と、国民が口にする食糧の60%を輸入に頼っている日本の現状、投機筋の動きや食料のバイオ燃料への転用などによる食料価格の高騰という、(畜産用の飼料まで含めた)「食の安全保障」の問題、この二つの脅威にさらされています。

多くの貧困層を抱える途上国では、逼迫する食糧事情が特に深刻で、国連のFAOの統計で、8億人を超えるといわれる飢えに直面する人口をさらに増加させています。こうした状況の中で、「飢え」の問題をどのように解決していったら良いのか、本日は「逼迫する食糧事情」に焦点をおき、同時に「食の安全」の問題の解決ともなりうる道筋を、アジア学院の卒業生たちによりアフリカのウガンダとアジアのミャンマー、カンボジアで実践されている取り組みを中心にご紹介したいと思います。また、大量の食糧を輸入する一方で、年間二千万トンもの食糧をごみとして捨てている私たち日本人は、この問題の解決にどのように関わっていったら良いのかをご一緒に考えたいと思います。

1. NHKのニュース番組で扱われたアジア学院についてのビデオ(5~6分)

最初に見ていただくビデオは、栃木県にあるアジア学院が、有機農法によって自給をめざす、アジア・アフリカの農村指導者を養成している様子を放映したNHKのニュース番組で、アジア学院のすべての活動・学びが「食」を中心になされていることを伝えています。

農薬の問題など負の影響を与えかねないなどの理由で批判の声が上がり、1994年にJICAの委員会がカンボジアへの農薬供与は不適切であったとの報告書を出したために、外務省は農薬援助を取り止めました。それから14年を経て、JICAは大きく変わろうとしています。一つは、SRIと呼ばれる稲作の手法を農民に広め、推進しているCEDACというNGOとの共同のプロジェクトを2006年に始めたのですが、JICA側の専門家として、ICU卒業後アジア学院で有機農業を身につけた山崎陽子さんを採用して、カンボジアに派遣しました。もう一つは、今年3月に有機農業の研修用に日本の有機農業を担ってきた人たちの協力を得て、英語で堆肥の作り方などの実践的な指導書が作られ、ビデオ教材も完成したので、今後食糧危機に直面している途上国に於いて、有機農業を担う人材育成に用いられることが

期待されています。農業分野では、最近青年海外協力隊員として途上国に派遣される若者の事前研修が、アジア学院で行われるようになりました。有機農業こそが、途上国の飢えの問題解決の道であるとの信念をもって、アジア、アフリカの農村指導者を育成してきたアジア学院は、JICAのこの新たな動きに非常に勇気づけられています。

配布印刷物の出典

- 1 「中国産餃子による中毒事件と再発防止への提言」 「土と健康」 2008年4・5月合併号、日本有機農業研究会
- 2 「アフリカの難民キャンプのこどもたち」 「キリスト教保育」 2008年10月号
- 3 「NGO協力情報—途上国の草の根農民のために—」 第53号 (社)国際食料農業 (FAO)協会 2004年11月